

HOSOO GALLERY 吉田真一郎「白の気配」展 開催

株式会社細尾（京都市中京区）が運営するHOSOO GALLERYにて「白の気配」展が本日、11月5日よりスタートいたしました。

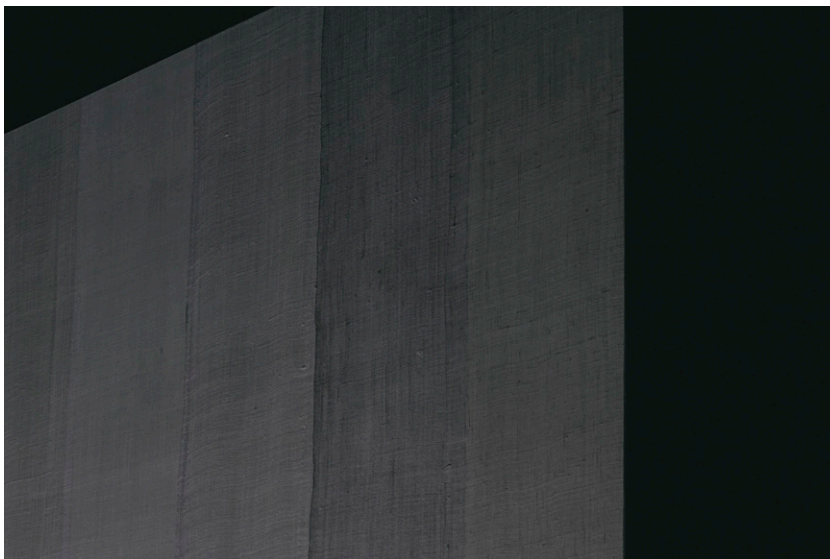
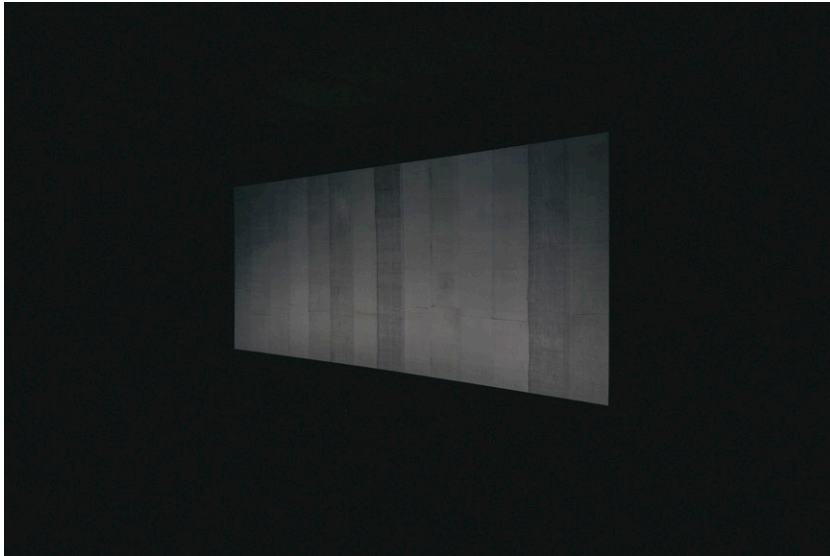
HOSOO GALLERYでは、これまでに織物をメディアとして捉え、布の歴史と未来を考察していく中で、織物を通じ「美とは何か」を問う様々な企画展示を発表してきました。本展では、美術家であり、自然布の蒐集家・研究家として知られる吉田真一郎氏と共に、作品《白》を公開いたします。本作は、吉田氏が麻布（大麻・苧麻）を蒐集し続ける中で、40年の歳月を経て完成した作品です。

本作品は膨大な吉田氏のコレクションの中より、1800年代の日本の大麻布が用いられています。本展は、暗の空間の中で、ただ作品を眺めていただくことで、目には見えないものの、確かに存在する光と陰の複雑さが生み出す未知の視覚体験をお楽しみいただけます。



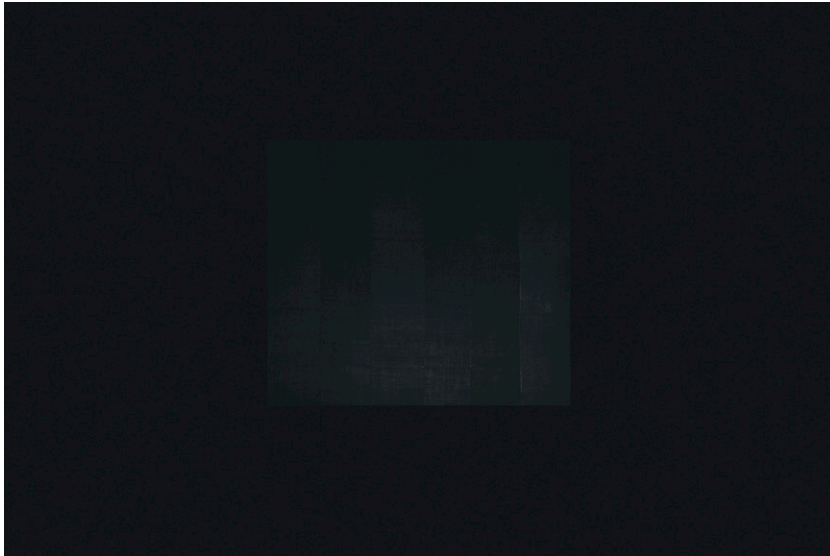
作品について

《白》



吉田氏は、本作について、「ただの白布と思えば、全て同じものを見ているような気になっているが、同じ白は一つもない」と述べています。そこにある僅かな違いによって生み出されるものが、目には見えない「気配」であると吉田氏は考えています。それは「物事を見ることとは何か」という、布という物質の世界の世界を超えた哲学的な問いかけへとつながっていきます。

《黒》



本展では《白》を主としつつ、対となる新作《黒》を公開しています。《黒》は、《白》同様に、吉田氏が蒐集した大麻繊維の黒布によって構成されています。これらの布は、藍染め（それぞれ藍の種類や産地、染めが異なる）や墨染めによって黒く染められたものと考えられますが、これらも全て黒布でありながら、やはり同じ黒はなく、その陰の中に織、糸、染めの手加減の違いが複雑な気配となって浮かび上がります。

吉田真一郎

1948年、京都府生まれ。近世麻布研究所所長。20代から絵画制作を始める。77年に西ドイツへ渡り、現代美術家のヨーゼフ・ボイスに出会い、帰国後、ボイスの影響から古美術や民俗学を独学で勉強し始める。江戸時代の苧麻布、大麻布の繊維と糸の研究を発表してきた。主な博物館展示に、奈良県立民俗博物館「奈良晒」展、滋賀県愛荘町立歴史文化博物館・東近江市立能登川博物館「高宮布」展、新潟県十日町博物館「四大麻布」展などがある。2012年、国立民族学博物館「布と人間の人類学的研究」にて研究発表。共著に『別冊太陽 日本の自然布』（2004年／平凡社刊）がある。2018年には、麻布の蒐集と研究が評価され、第6回水木十五堂賞を受賞。



主催：株式会社 細尾 作家：吉田真一郎
空間構成：周防貴之 照明設計：豊久将三
キュレーション：井高久美子 リサーチ：原瑠璃彦 デレクション：細尾真孝
宣伝美術：森田明宏 写真撮影：田中恒太郎

< 展覧会概要 >

吉田真一郎「白の気配」

会期：2021年11月5日（金）-2022年3月20日（日）

会場：HOSOO GALLERY

京都市中京区柿本町 412 HOSOO FLAGSHIP STORE 2F

電話：075-221-8888

開館時間：10:30-18:00（年末年始、祝日を除く、入場は閉館の15分前まで）

入場料：無料 www.hosoogallery.jp



< HOSOOについて >

『細尾』は元禄年間（1688年）、京都西陣において大寺院御用達の織屋として創業しました。京都の先染め織物である西陣織は1200年前より貴族をはじめ、武士階級、さらには裕福な町人達の圧倒的な支持を受けて育まれてきました。『細尾』は今、「帯」や「きもの」といった伝統的な西陣織の技術を継承しながら、革新的な技術とタイムレスなデザイン感性を加えることによって、唯一無二のテキスタイルを生み出し、国内外のラグジュアリーマーケットに向けて展開しています。
www.hosoo.co.jp

